

アルファベット

K T境界(ケイティーきょうかい) : 恐竜(きょうりゅう)やアンモナイトなどが生きていた中生代(ちゅうせいだい)とそれらが絶滅した新生代(しんせいだい)の境のこと。約6,500万年前。

K T境界層(ケイティーきょうかいそう) : K T境界を示す地層のこと。日本では浦幌町川流布(かわるっぶ)にだけ見ついている。(p25)

U字谷(ユーじこく) : 横断面がU字形の谷。氷河が流れる時にできる谷は多くがU字谷になる。 V字谷(ブイじこく)

V字谷(ブイじこく) : 横断面がV字形の谷底がせまい谷。速い流れが川底を下へけずってできる。 U字谷(ユーじこく)

あ

アイヌ(アイヌ語) : 「アイヌ」ということばには、(神や動物に対しての)人間という意味、(メノコ〔女性〕に対しての)男性という意味、(民族名としての)アイヌという意味がある。(参考 : 『アイヌ語沙流方言辞典』より)

アイヌ文化振興法(アイヌぶんかしんこうほう) : アイヌの人々の民族としての誇り(ほこり)が尊重される社会を実現しようとするための法律。正式には「アイヌ文化の振興(しんこう)並びにアイヌの伝統(でんとう)等に関する知識の普及(ふきゅう)及び(および)啓発(けいはつ)に関する法律」という。(p150)

アイヌモシリ(アイヌ語) : アイヌ(人間)の国。これに対して、カムイ(神)が生活する世界のことをカムイモシリ(神の国)という。自然の生き物や自然現象などは、カムイモシリからカムイが何かの目的をもってアイヌモシリにやってきたもの、もしくはやってきたことによって起きたことである。

亜炭(あたん) : 水底にたまったかれ草やかれ木があまり分解されず(くさらず)土にかえられないままたまり、だんだんと炭になっていったもの。泥炭(でいたん)が地熱や圧力で、さらに炭になっていった(炭化した)もの。広い意味の石炭に入り、石炭としては質が悪い(炭化度が低い)もの。亜炭というのは日本独自の呼び名で、正式には「褐炭(かつたん)」という。また、褐炭のうち質が悪いものを亜炭ということもある。(p41)

い

イオマンテ(アイヌ語) : 山で子グマをつかまえたとき、コタン(集落)に連れ帰り1年ほど大切に育てる。その後、子グマの霊(れい : カムイ)におみやげをもたせて、クマのカムイの親元(カムイの国〔カムイモシリ〕)に帰して(送って)あげるという儀式(ぎしき)。クマのほかにはシマフクロウなどでもおこなわれる。自然のめぐみへの感謝と、これからもめぐみがあるようにとの願いがこめられる。

イオル(アイヌ語) : 伝統的なアイヌ文化で、あるコタン(集落)や個人が漁や植物採集、狩り(かり)などのために利用する、川や山野の範囲(はんい)のこと。

イクパスイ : 木で作ったヘラのようなもので、カムイにいのり、語りかける時に手に持つ。イナウとともにカムイへことばを伝えてくれる。(p134)

遺跡(いせき) : 昔の人々の生活のあと、昔つくられたものや建

物のあと、あるいはほられた穴のあとなどが集まり、広がりをもって残されているところ。地表のものはこわされたり、風化したりしてなくなりやすいため、土などにおおわれて地中になったところに残されることが多い。遺跡で見つかったもののうち、石器や土器など移動させることのできるものを遺物(いぶつ)といい、家のあとや墓穴のあとなど移動させることができないものを遺構(いこう)という。(p70)

遺存種(いぞんしゅ) : 過去に栄え、その後はおとろえている生物のこと。北海道のナキウサギなどは氷期の遺存種である。個体数が減ったもの、分布がせまくなったものも遺存種である。レリックまたは生きている化石ともいう。(p63)

一級町村(いっきゅうちょうそん) : 町村会の議員が住民によって選ばれ、町村長を町村会の選挙で選ぶことのできる町や村。

イナウ(アイヌ語) : 木の棒をけずって作った祭祀具(さいしぐ)。カムイ(神)にささげ、カムイに語りかける時にはイクパスイとともにことばの仲立ちをする。また、イナウ自体がカムイへのおみやげであり、家の中にかざっているイナウが多いカムイほど、人間からたよりにされていることになる。(p134・p122・p128)

イバキッニ(アイヌ語) : サケの頭をたたいて殺す道具。ただの道具ではなく、カムイにことばを伝え、カムイへのおみやげとなる「イナウ」のひとつとされた。(p122)

う

ウライ(アイヌ語) : 小川で魚をとるしかけ。川に立てた数本のくいにヤナギの枝をからませることで魚の行き場をさえぎり、魚がラオマツという「どう」の中に入りこむようにしたもの。(p119)

え

駅通所(えきていしょ・えきていじょ) : 北海道の開拓時代(かいたくじだい)、開拓者や商人、旅行者などの宿泊所であり、人や馬の貸し出しをしたところ。駅通所制度は昭和21年(1946)まで続いた。(p163)

エコロジー(Ecology : 英語) : もともとは「生態学(せいたいがく)」とあって、生き物のことを生き物同士のつながりや、周りの環境(かんきょう)とのつながりによって研究する学問のこと。今では自然環境に関すること、ゴミ・公害・健康問題など人間が暮らす環境のこと、また、それらのことを考えること、さらに、考えた結果の暮らし方、ものの見方や工夫(くふう)、つくり出されたものなども指す。

エゾ(蝦夷) : いろいろな説があるが、平安時代(へいあんじだい)の末以降、「エミシ」と読んでいた「蝦夷」を「エゾ」と読むようになり、地名としては北海道を指し、人間の集団としてはアイヌ民族を指すようになったともいう。江戸時代(えどじだい)には、道南にあった松前藩(まつまえはん)の直接支配地を「和人地(わじんち)」と呼び、それ以外の北海道の大部分をアイヌ民族の土地として「蝦夷地(えぞち)」と呼んだ。

エミシ(蝦夷) : いろいろな説があるが、古代日本で大和朝廷(やまとちやうてい)が支配を広げる中、東北地方以北で大和朝廷に従っていなかった人々に対する、大和からの呼び名ともいわれる。アイヌ民族(の祖先)もふくまれる。鎌倉時代(かまくらじだい)のころから「蝦夷」をエゾと読むようになり、北海

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展と今そして未来へ

用語 さくいん

道とアイヌ民族（の祖先）を指すようになったともいわれる。
えん堤（えんてい・堰堤）：川の水や土砂（どしゃ）をせきとめるために、川の流れを横断してつくられた構築物のこと。（ p194）

か

カール（Kar・ドイツ語）：氷河となる氷ができた、山頂近くにある半円形の谷地形のこと。圏谷（けんこく）ともいう。

櫂（かい）：水をかいて舟（ふね）や船を進める道具。

海溝（かいこう）：海底が細長くみぞのようになっているところで、深さ6kmより深いものをいう（浅いものはトラフ）。北海道の東南部には千島海溝（ちしまかいこう）があり、本州の東部には日本海溝がある。マリアナ海溝の最深部は1万m以上の深さがある。プレートがほかのプレートの下にすみこむところ。（ p23）

海進（かいしん）：地球が温暖になると、氷河（ひょうが）や氷床（ひょうしょう）など陸上にある氷がとけて、その水が海に流れこむ。すると海水が増え、海水面が高くなり、そのため陸地がせまくなる。海が内陸に進んでくることになるので、これを海進という。約6千年前（縄文時代〔じょうもんじだい〕前期）には氷期のあと最も暖かい気候となり、この時の海進を縄文海進（じょうもんかいしん）という。（ p84） 海退（かいたい）

海成層（かいせいそう）：海の底にたまったものでできた地層。長い間に地面がもり上がることで、今では丘（おか）や山になっていることもよくある。（ p33）

海退（かいたい）：地球が寒冷になると、地上に降った水分がこもりついて海に流れこむ水の量が減る。これによって海水面が低くなり、陸地が広がる。海岸線が海側へ後退するので、これを海退という。最近の氷期（約8万～1万年前）の時には、北海道はサハリンと、サハリンは大陸と陸続きになったため、北海道は大陸からのびる半島の先だった。（ p62） 海進（かいしん）

開拓（かいたく）：山野を切り開いて、田畑にすること。

開拓使（かいたくし）：北海道など北方の開拓のため、明治2年（1869）から明治15年（1882）まで置かれた役所。

開発（かいはつ）：土地や資源などを、暮らしや産業のある目的に合わせて利用しやすくすること。

外来種（がいらいしゅ）：おもに人間の活動によって持ちこまれた、もともとその地域にいなかった生き物。 在来種（ざいらいしゅ）

海嶺（かいらい）：海底山脈のこと。プレートが生まれ、分かれていくところで、地下からマグマがのぼってくる。（ p23）

鍵層（かぎそう）：広い範囲（はんい）にあり、ほかの地層と見分けが付きやすく、どちらかという短い期間でたまったため、はなれた場所にある地層の新旧を判断する基準となる地層のこと。火山灰（かざんばい）の地層は、鍵層によく使われる。（ p21）

火口（かこう）：火山活動によって、地下のマグマや火山ガスがふき出す場所。または、かつてマグマなどがふき出したことによってできた円形に近いくぼみ。多くの場合、直径約1km以下。

火砕流（かさいりゅう）：火山が爆発的（ばくはつてき）に噴火（ふんか）した時などに、くだけ散ったマグマ（火山灰や火山れき）が高温のガスと一体になって、重力によって流れ下るもの。数百 ととても熱く、時速数十km（100kmをこえる時）も）とても速いので、おそわれたらまず助からないというおそろしい火山の活動。（ p336）

火山（かざん）：地下深くにあったマグマや火山ガスがふき出すところ。ふつうは地形的な高まりをいうが、爆発（ばくはつ）や陥没（かんぼつ：落ちくぼむこと）によってできた地形もふくめる。水中にもある。

火山岩（かざんがん）：火成岩（かせいがん）の中で、マグマが急に冷やされてできた岩石。多くが火山からふき出してできる。溶岩（ようがん）や凝灰岩（ぎょうかいがん）など。

火山灰（かざんばい）：火山からふき出したもので、マグマが粉々にくだけたもの。木や紙などが燃えてできる灰とはまったく異なる。地質学では直径2mm～1/64mmまでのものをいう（2～64mmのものは「火山れき」、64mm以上のものは「火山岩かい」）。また、工事や園芸などで利用するために凝灰岩（ぎょうかいがん）をけずり取ったものも、火山灰と呼ばれる。

火山れき（かざんれき・火山礫）：火山からふき出したマグマがくだけたもので、直径2～64mmのもの。2mm以下は「火山灰」、64mm以上は「火山岩かい」。

火成岩（かせいがん）：マグマが固まることでできた岩石。火山岩（かざんがん）と深成岩（しんせいがん）などに分かれる。ほかの岩石としては堆積岩（たいせきがん）と変成岩（へんせいがん）がある。

化石（かせき）：昔の生き物の体や生き物が残したあと。（ p21）

河川敷（かせんしき）：堤防（ていぼう）と堤防の間などで、ふだん水が流れていない平地のこと。正式には高水敷（こうすいしき）という。洪水（こうずい）の時に水が流れるところ。広い意味では、ふだん水が流れているところ（低水路）も河川敷にふくまれる。

河川法（かせんほう）：川をどのように管理し、どのように利用するかについて定めた法律。（ p205）

活火山（かつかざん・かつかざん）：おおむね過去1万年以内に噴火（ふんか）したことがわかっている火山と現在活発な噴気活動（ふんきかつどう：ガスがふき出すこと）のある火山（火山噴火予知連絡会・気象庁による定義）。

カムイ（アイヌ語）：「神」のこと。自然の生き物や自然現象を中心に、さまざまなカムイがいる。（ p134）

カムイチェブ（アイヌ語）：サケのこと。神の魚という意味。

カムイモシリ（アイヌ語）：カムイ（神）の国。これに対してアイヌ（人間）が生活する世界をアイヌモシリ（人間の国）という。自然の生き物や自然現象などは、カムイモシリからカムイが何かの目的をもってアイヌモシリにやってきたもの、もしくはやってきたことによって起きたことである。

軽石（かるいし）：火山からふき出したもので、穴がたくさんあいているかたまりのうち、明るい色をしたもの。黒っぽいものは「スコリア」という。マグマにとけていた水分などがガス化して穴をあけた。軽石の火山灰もある。ただ、一般的には細か

いものを軽石と呼ばず「軽石と火山灰」と分けることも多い。
カルデラ：多くの場合輪かくがほぼ円形の、火山活動によってできた陥没地（かんぼつち：落ちこんだところ）のこと。火口より大きく、多くの場合直径約1km以上で、周囲が急なガケで取り囲まれていることが多い。

カルデラ湖（カルデラこ）：カルデラに水がたまってできた湖。洞爺湖（とうやこ）や摩周湖（ましゅうこ）、支笏湖（しこつこ）など。かつては三股盆地（みつまたぼんち：上士幌町）もカルデラ湖であったという。（ p36）

監獄（かんごく）：今の刑務所（けいむしょ）。（ p160）

間氷期（かんびょうき）：氷期と氷期の間の暖かい時期。

顔料（がんりょう）：ものに色をつける時に使う材料のうち、水や油にとけないもの。水性顔料（すいせいがんりょう）は水の中にとても細かい顔料が混ざっている状態のもので、とけているのではない。

き

帰農（きのう）：農業をやめていた人や都会で農業をやっていた人が、農業をはじめること、また農業をするためにふるさとへ帰ったり、都会をはなれたりすること。（ p185）

凝灰岩（ぎょうかいがん）：火山からふき出した火山灰が地上や水中にたまり積もり固まってできた岩石。「タフ」ともいう。

恐竜（きょうりゅう）：中生代の陸上八虫類をいう。大きなものになると体長35m、体重75トンというものまでいた。約6,500万年前に絶滅した。

く

空襲（くうしゅう）：飛行機やヘリコプターなどによる攻撃（こうげき）。（ p197）

くんせい（燻製）：保存性や風味を高めるため、魚や肉などをけむりでいぶしたもの。

こ

交易（こうえき）：はなれたところに住む人と、ものの交かんや売買をおこなうこと。

洪水（こうずい）：川の水が大雨や雪解けによって、ふだんより流れが増えること。増水（ぞうすい）。水がふだんの流れからあふれ出る「はんらん」を指すこともある。

鉱物（こうぶつ）：水晶（すいしょう）や雲母（うんも）のように化学的成分が均一の結晶体（けっしょうたい）で、一定の性質をもつ無機質（むきしつ）の固体物質をいう。ちなみに岩石は、鉱物やくだけた岩石が集まってできたもの。

広葉樹（こうようじゅ）：カシワやモミジなどのように広く平たい葉をもつ樹木。

護岸（ごがん）：川岸を水の流れから守ること、または守る方法。（ p212）

国郡制（こくぐんせい）：明治2年（1869） 開拓使（かいたくし）が北海道を11国86郡に分けた制度。十勝地方は「十勝国（とかちのくに）」となり、7郡に分けられた。足寄郡（あしよろぐん）は釧路国（くしろのくに）に入れられた。郡名は、多少ズレはあるが、多くが今でも使われている。（ p156）

黒曜石（こくようせき）：ガラス質の火山岩（かざんがん）。

黒っぽいものが多く、割ると貝ガラのような鋭い断面（だんめん）になる。ねばり気が強く（二酸化ケイ素が多く）、水分

の多いマグマが急に冷やされてできるといわれる。石器の材料としてよく使われる。

古砂丘（こさきゅう）：大昔にできた砂丘（さきゅう）のこと。土におおわれたあとでも波をうった地形となっていることがある。十勝では約4万年前の支笏（しこつ）火山灰による古砂丘と約1万8千年前の恵庭（えにわ）火山灰による古砂丘がある。

小作（こさく）：広い土地を持つ地主から土地を借りて耕し、定められた小作料（おもに生産物）を地主にはらうこと。小作をする人を小作人（こさくにん）、小作者（こさくしゃ）、小作農（こさくのう）と呼ぶ。

コタン（アイヌ語）：集落のこと。

戸長役場（こちょうやくば）：役場といっても住民によって選ばれた市町村長や議員はなく、国から任命（にんめい）される戸長のもとで、地域の管理をおこなった。

骨角器（こつかくき）：動物の骨や角（つの）を利用して作られた道具。旧石器時代にも使われていたが、石器や土器とちがって分解され土にかえるため、古い時代のものはなかなか見つからない。

さ

栽培漁業（さいばいぎょぎょう）：自然産卵（しぜんさんらん）の場合、卵から仔魚（しぎょ）になり、稚魚（ちぎょ）になるまでの間に多くの魚が死んでしまう。そこで、人の手で卵からふ化させ、稚魚（ちぎょ）になるまで育ててから時期を見て自然に放すと、少ない卵からでも多くの成魚が育つようにできる。このように途中（とちゅう）まで人の手で育てた上で魚をとることを栽培漁業という。養殖（ようしょく）のように成魚になるまで育てることをしない。サケなどでおこなわれている。

細胞（さいぼう）：生き物の体を形づくる基本的なもの。

在来種（ざいらいしゅ）：もともとその地域で生きていた生き物。外来種（がいらいしゅ）

砂丘（さきゅう）：砂漠（さばく）など砂が広がった場所で、風によってふき寄せられることでできた砂の丘（おか）。

札幌県（さっぽろけん）：明治15年（1882）開拓使（かいたくし）がなくなり、北海道には函館県（はこだてけん）・札幌県・根室県（ねむろけん）の3県が置かれることになった。翌年には農商務省北海道事業管理局が設置され、この時期を三県一局時代と呼ぶ。十勝はほとんどが札幌県に入り、足寄郡（あしよろぐん）は根室県に入った。（～明治18年〔1885〕）（ p156）

擦文（さつもん）：土器表面を木のへらで擦って（こすって）つけた文様（もんよう：もようのこと）。北海道で8世紀末から13世紀ころまで見られる土器を特ちょうづけ、この時代を擦文時代という。

産卵（さんらん）：卵を産むこと。

産卵床（さんらんしょう）：魚が卵を産むために水底などにつくるくぼみ。自然状態のサケでは、わき水のあるれき質の（小石の）川底をメスがほることでつくり、産卵後、石でおおわれる。ふ化した仔魚（しぎょ）はしばらくこの中で暮らし、稚魚（ちぎょ）にまで育ててエサを食べるようになると流れの中につき上がる。

し

仔魚（しぎょ）：ふ化してから、すべてのヒレのスジの数が、成

魚と同じになるまでの子どもの魚。そのあとは稚魚（ちぎょ）という。サケは、仔魚の間は栄養のふくろをつけていてエサをとらず、稚魚になってからエサを食べるようになる。

自作農（じさくのう）：自分の土地を耕す独立した農民。

湿原（しつげん）：しめった場所に広がる草原。かれ草などが分解されにくく（土にかえりにくく）泥炭（でいたん）が得意やすい。

湿地（しっち）：しめった土地。

砂利（じゃり）：小石。小石の集まり。小石に砂が混ざったもの。

集落（しゅうらく）：数軒（すうけん）以上の家が集まって人々が暮らしているところ。アイヌ語でコタン。

しゅんせつ（浚渫）：水面下で水底や水底にたまったものをさらいとること。（ p211）

城柵（じょうさく）：7世紀から、大和朝廷（やまとちやうてい）が東北地方のエミシを支配し、和人を移住させるために設置した、柵（さく）や盛土（もりつち）などで守りを固めた役所。交易の拠点（きょてん）ともされたという。

浄水場（じょうすいじょう）：水を浄化（じょうか）：きれいにすること）して、暮らして使う水道の水（いわゆる水道水）とするところ。

縄文（じょうもん）：土器表面に縄（なわ）を転がすことでつけた文様（もんよう）：もよう）のこと。縄文文化の特ちょうだが、縄文時代が始まってしばらくは、土器に縄文が見られない。北海道では擦文文化（さつもんぶんか）に入ると、見られなくなる。

殖民地（しよくみんち）：開拓者（かいたくしゃ）が開拓をするための土地のことで、役所によって決められ、区分けされている。植民地（しよくみんち）とは異なる。

殖民地解放（しよくみんちかいほう）：開拓者（かいたくしゃ）に殖民地（しよくみんち）：開拓のための土地）貸しつけが始まること。十勝では明治29年（1896）から。

シルト：岩石がとて細かくなったもので、砂と粘土（ねんど）の中間くらいの粒子（りゅうし）の集まり。直径1/16mm～1/256mmのもの。

新水路（しんすいろ）：それまで水が流れていなかった場所に水を流すためつくられた水路。（ p190）

深成岩（しんせいがん）：マグマが地下でゆっくり冷えることによってできた岩石。火成岩（かせいがん）のひとつ。花こう岩やかんらん岩など。

針葉樹（しんようじゅ）：マツやモミなどの針のように細長い葉をもつ樹木。北海道の自然では高地など寒いところで見られる。

す

水害（すいがい）：川の洪水（こうずい）や海の高潮（たかしお）などによって、人の暮らしがダメージを受けること。

水制（すいせい）：岸から流れの中に流れにくいもの（大型のコンクリートブロックやくいなど）をつき出すように置くことで、その場所の流れをおさえ、川岸がけずられるのを防ぎ、川が運ぶ土砂をため、流れを岸から遠ざける方法。（ p212）

スサム（アイヌ語）：シシャモのこと。「シシャモ」ということばは「スサム」からできた。スサムは「スス・ハム（ヤナギ・葉）」からきている。（ p119）

砂（すな）：細かい石。地質学では、岩がぐだけたもののうち直径2mm～1/16mmのものをいう。

せ

生態系（せいたいけい）：生き物の集まりとその周りの環境が、つながりまとまっている様（系）：けい）。

石器（せつき）：石を加工してつくられた道具のこと。ナイフ、ヤリ先、ヤジリ（矢の先）、皮をなめすためのスクレイパー、キリ、すり石、石おの、漁網（きょもう）のおもりなど、さまざまな道具が、いろいろな技術によって作られている。

先史時代（せんしじだい）：文字による記録がない時代のこと。

扇状地（せんじょうち）：川の水は、流れが速いほど大きなれき（石）を運ぶことができる。山地の急流が平地に流れ出すと、流れがおそくなっていくため、それまで運んでいたれきを大きなものから置き去りにしていく。こうしてできたななめで、おうぎ形（扇形）に広がった平地を扇状地という。

扇状地面（せんじょうちめん）：扇状地の表面。段丘（だんきゅう）：ができたあと、扇状地であったところがほとんどけずられずに残されてできた段丘面（だんきゅうめん）のことを、とくに分けて扇状地面ということがある。

た

堆積岩（たいせきがん）：海底や湖底、あるいは地表にたまり重なったものが固まってできた岩石。

蛇行（だこう）：曲がりくねっていること。曲がりくねって進むことや流れること。

多細胞生物（たさいぼうせいぶつ）：細胞（さいぼう）がたくさん集まってひとつの体をつくっている生き物。人も犬もヤナギもタンポポもクワガタもカモ多細胞生物。単細胞生物（たんさいぼうせいぶつ）

館（たて）：14～15世紀に北海道南西部へ移住した和人がつくった、その地域（ちいき）の支配拠点（しはいきょてん）であり、交易拠点（こうえききょてん）であり、戦いの砦（とりで）となったもの。

竪穴式住居（たてあなしきじゅうきょ）：地面を数十cmほり下げた床（ゆか）（と壁〔かべ〕）にして、柱を立て、草や樹皮などの屋根をかぶせた家のこと。地面に対してタテに穴をほるため、「竪穴式」と呼ばれる。洞窟（どうくつ）など斜面やガケの横穴を利用した「横穴式住居」に対応した名前。北海道では縄文時代（じょうもんじだい）から、続縄文時代（ぞくじょうもんじだい）擦文時代（さつもんじだい）までつくられる。（ p85）

タフ（tuff・英語）：火山からふき出した火山灰が地上や水中にたまり積もってきた岩石。「凝灰岩（ぎょうかいがん）」。タモ網（タモあみ）：細い枝や竹、針金などの口輪がついたふくろ状の網（あみ）に柄（え）をつけたもの。虫取り網のようなもの。魚をすくい取るのに使う。

段丘（だんきゅう）：川の流れに対してだいたい平行にあり、ガケと平地でできている階段のような丘（おか）。川の流れの速さが速い時に川底を深くけずり、おそくなった時に横方向に谷を広げて平地をつくることのできる。（ p49）

段丘面（だんきゅうめん）：段丘（だんきゅう）の上にある平地。階段でいえば、足をおくところ。かつて川がその高さを流れていた時には、氾濫原（はんらんげん）だった場所。もともと扇

状地(せんじょうち)だった平地の場合は、「扇状地面(せんじょうちめん)」として分けることがある。(p49)

団体入植(だんたいにゅうしょく):近くに住民たちが集まり、また、大きな農場にやとわれ(小作となり)、開拓するために集団で移住すること。(p166)

単細胞生物(たんさいぼうせいぶつ):生まれてから死ぬまで、ひとつだけの細胞(さいぼう)で体ができている生き物。多細胞生物(たさいぼうせいぶつ)

断層(だんそう):地層や岩盤(がんばん:岩の板)に力がかかって割れ、割れ目にそってずれたところ。これからも動く可能性がある断層を「活断層(かつだんそう)」という。

ち

チェブ(アイヌ語):魚のこと。

稚魚(ちぎょ):すべてのヒレのスジの数が、成魚と同じになってから、ウロコができあがるまでの間の魚。その前は仔魚(しぎょ)という。

治水(ちすい):洪水(こうずい)による水害から人間の生命・財産・生活を守ること。おもに川自体や川にかかわる施設(しせつ)などを整備すること。(p211)

チセ(アイヌ語):家のこと。平地式住居。(p130)

チブ(アイヌ語):舟(ふね)、とくに丸木舟(まるきぶね)のこと。(p128)

チャシ(アイヌ語):アイヌ文化期につくられた、高台の地面に一本から数本のみぞ(壕:ごう)がめぐらしてあるところ。目的ははっきりとわかっていないが、伝承によると、戦いの時の砦(とりで)、カムイがやってくる場所、見張り場、話し合い(チャランケ)の場所、などとされている。1669年のシャクシャインの戦いの時、シャクシャインはシベチャリチャシ(新ひだか町静内)を砦として利用した。チャシのあとのことをアイヌ語ではチャシコツ(チャシあとの意味)といい、豊頃町の安骨(あんこつ)は元はチャシコツにあてた字だった。(p116)

柱状節理(ちゅうじょうせつり):節理(せつり)とは、ズレがないひび割れのこと。岩体が冷えて体積が収縮する時、このひび割れがタテに入ること、岩が柱のように分かれる。この場合の割れ目を柱状節理という。層雲峡(そうんきょう:上川町)が有名だが、十勝でも、屈足(新得町)や黒石平(上土幌町)などの川ぞいで見ることができる。(p37)

徴兵(ちょうへい):国が国民を強制的に軍隊に入れること。(p196)

て

泥炭(でいたん):湿原(しつげん)でかれた草などの分解がすすまず(あまり土にかえらず)、炭のようになっていったもの。石炭になり始めの段階。

堤防(ていぼう):川の堤防は、流れにそって土などを長く盛り上げ、川の水が増えても下流に流せるようにしたもの。(p211)

寺子屋(てらこや):江戸時代にあった、あまり身分が高くない人のための学校や塾(じゅく)のようなもの。武士・僧(そう)・医者などが先生となり、習字・読み方・そろばんなどを教えた。明治時代の十勝では、開拓地(かいたくち)にあった寺で僧が先生となって教育したところをいう。(p168)

と

頭首工(とうしゅこう):川や湖などの水を用水路に引き入れるための施設(しせつ)。ふつうは、せき、取り入れ口、そしてそれともなう施設(しせつ)から構成されている。千代田堰堤(ちよだえんてい)は頭首工の一部にあたる。(p214・p194)

凍上抑制層(とうじょうよくせいそう):冬になると地面(の水分)がこおる。寒さがきびしいと地中までこおりつき、土の体積が大きくなることで地面が持ち上がり(凍上し)、道路の舗装(ほそう)などをこわす。そこで、道路工事などの時、寒くなくてもこおりつかない深さまで土をとりのぞき、水はけがよく、こおりつきにくいもの(火山灰や砂利〔じゃり〕など)を厚くしく。この層のことを凍上抑制層という。(p39)

十勝組合(とちかくみあい):明治時代に入り、開拓使(かいたくし)によって、それまでの交易や産業に対する商人による支配がなくなっていくが、十勝では支配がなくなることにより、道路や宿などの管理者がいなくなることで、アイヌ民族のかせぐところが失われ、さらに和人が漁場や山野に入ってくることで、アイヌ民族の暮らしが成り立たなくなることが予想された。そこで明治8年(1875)、開拓使の強いすすめにより、それまで支配商だった福嶋屋(ふくしまや)(杉浦家)の支配人である若松忠治郎(わかまつちゅうじろう)を中心にした和人6人とアイヌ民族7人を代表とする「十勝組合」がつくられ、十勝の産業(漁や狩り)と交易を管理、発展させた。実質的な活動は明治10~12年(1877~79)だったが、かなりの利益をあげ、福嶋屋杉浦家からの借りを返し、教育所を建て、病院新設にもお金を出し、残ったお金を代表13人と和人40人あまり、アイヌ民族277戸で分けた。この十勝組合の発展を知った和人が、十勝での漁や狩りの解放を求め、また、交易や密猟(みつりょう)をおこなうためやってくるようになった。十勝組合は明治13年(1880)に解散した。(p145)

土器(どき):粘土(ねんど)をこねて形にし、火で焼いて作ったナベやカメなどの器(うつわ)のこと。土器が使われるようになって縄文文化(じょうもんぶんか)に入る。表面に付けられた文様(もんよう:もようのこと)や形は時代や時期によって変化する。北海道では擦文時代(さつもんじだい)まで使われ、アイヌ文化になって使われなくなる。

土偶(どぐう):人の形をした土製の焼き物。(p95)

渡船(とせん):橋がないところで川をわたるための舟(ふね)。人とちょっとした荷物が乗るくらいのもので、自動車やバスを運んだものまでいろいろある。渡し舟(わたしぶね)ともいう。渡船の舟着き場(ふなつきば)を渡船場(とせんば)という。(p176)

砦(とりで):外敵から大切な場所を守るためにつくる構築物。

な

ナイ(アイヌ語):川のこと。厚内(あつない)・札内(さつない)・糠内(ぬかない)・長流枝内(おさるしない)・新内(にいない)などの「内」は、この「ナイ」にあてた漢字。(p127)

に

二級町村(にきゅうちょうそん):町村長は国から任命されるが、

町村会の議員は住民が選ぶことのできる町や村。

ぬ

ヌサ(アイヌ語)：イナウをいくつも立てた祭だん。各家の外の
上流側にあり、カムイノミ(カムイへのいのり)の時などには、
新たに作られたイナウが立ちならぶ。(p134)

ね

粘土(ねんど)：岩石や鉱物(こうぶつ)が、とても細くなったもの(直径1/256mm以下)。水分があるとねばりけがあり、
いろいろな形を作ることができ、熱すると固くなる。土器や陶
器(とうき)などをつくる材料となる。

の

農地改革(のうちかいかく)：農地の所有制度を改めること。と
くに第二次大戦後、昭和22年(1947)から、連合国軍最高司
令官総司令部(GHQ)の指令によって行われた日本農業の改革
で、農地のあるところに住んでいない地主(不在地主)のすべ
ての農地と、農地の近くに住んでいる地主の貸しつけ地のうち
保有限度(北海道で4畝)をこえる農地を国が(安く)買いと
り、小作者に売りわたして自作農にしたことを指す。(p
149・p185)

農地解放(のうちかいほう)：大農場や地主が小作者(こさくし
ゃ)に土地を分けあたえ、自作農にさせること。(p185)

は

場所(ばしょ)：江戸時代(えどじだい)、松前藩(まつまえ
はん)がアイヌ民族との交易をするために北海道を区切ったが、
その区切りを「場所」あるいは「商場(あきないば)」とい
った。十勝地方は「トカチ場所」とされた。(p137)

場所請負制度(ばしょうけおいせいど)：はじめ、アイヌ民族と
の交易のために区切られた「場所」では、松前藩(まつまえは
ん)の上級家臣が直接交易を支配をしていたが、のちに、商人
がその家臣や松前藩に対してお金を支払うことで、一定期間、
その「場所」で交易することができるようにされた。その制度
のことを場所請負制度という。(p140)

は虫類(はちゅうるい・爬虫類)：ワニ、トカゲ、ヘビ、カメの
仲間のこと。絶滅した恐竜(きょうりゅう)もこの仲間とい
われている。

発掘・発掘調査(はくつ・はくつちょうさ)：昔のできごと
や暮らし、生き物のことなどを調べるために、地面をほること。
一度ほってしまうと元にはもどせないで、しんちょうにおこ
なわれる。遺跡(いせき)の場合、文化財保護法(ぶんかざい
ほごほう)によって、発掘が禁止されていて、工事などでこわ
されてしまう場合か、学術的に必要な場合だけ許可されている。

馬頭観音(ばとうかんのん)：もともとは、観音(かんのん)が
変身したすがたの一つで、迷いをなくし悪を破壊(はかい)す
る菩薩(ぼさつ)だった。それが、時がたつうちに、馬を病や
ケガから守る力をもつものとして、信仰(しんこう)されるよ
うになっていった。馬頭観世音菩薩(ばとうかんのんぼさつ)。

氾濫(はんらん)：川の水がふだん流れている水路からあふれ出
すこと。堤防(ていぼう)がある場所では、堤防からあふれ出
すことをいう。

氾濫原(はんらんげん)：洪水(こうずい)で川から水があふれ
ることのできた、ゆるい傾斜(けいしゃ：かたむき)の土地。

川の流れとあまり高さが変わらず、洪水の時水があふれやすい
場所で、また、川の流れが移る可能性があるところでもある。

ひ

引き揚げ者(ひきあげしゃ)：昭和20年(1945)まで日本の支
配下にあったり日本領だったところに暮らしていた日本人で、
敗戦によって今の日本領に帰ってきた人のこと。(p185)

樋門(ひもん)：堤防(ていぼう)の下をくぐるとびらのついた
水路のこと。堤防があっても水の出入りができるようにするた
めのもの、洪水(こうずい)の時にはとびらが閉じられる。
(p213)

氷河(ひょうが)：長年にわたって積もった雪が、その重みで固
まって巨大な氷となり、ゆっくりと斜面(しゃめん)を下って
いくもの。(p52)

氷期(ひょうき)：地球の気候が長い間(数万年以上)寒くなる時で、
氷床(ひょうしょう)や氷河(ひょうが)が広がる時。正確に
は中緯度(ちゅういど)の非山岳(ひさんがく)地帯に氷床が
存在している時期。過去に何度もあり、氷期と氷期の間の暖か
い時期を「間氷期(かんぴょうき)」という。最も最近の氷期
(最終氷期)は約8万~1万年前だった。(p52)

ふ

風化(ふうか)：地表にある岩石が、空気・日光・風雨雪・温度
などにさらされることで、だんだんとこわれていくこと。

風俗(ふうぞく)：衣食住など暮らしの中における決まり事やな
らわし、身なりなど。

ふ化(ふか・孵化)：生き物が卵からかえること。または、生き
物を卵からかえすこと。

ふ化場(ふかじょう・孵化場)：生き物の卵をかえすための場所。
この本では、サケのふ化場のことをいう。サケのふ化場では、
川でつかまえた親ザケが成熟するまで池で育て、サケのメスか
ら卵を採り出し、オスの精液をかけて受精させ、卵を育て、サ
ケの子ども(仔魚：しぎょ)をふ化させ、稚魚(ちぎょ)にな
るまで育て、時期を見て川に放流する。

複合古砂丘(ふくごうこさきゅう)：砂丘(さきゅう)ができた
あとしばらくたってから、新しい砂漠(さばく)ができた時、
前の砂丘(古砂丘〔こさきゅう〕)の上に新しい砂丘が重な
るようにしてできた、二重の古砂丘のこと。十勝では約4万
年前の支笏(しこつ)火山灰による古砂丘の上に約1万8千年
前の恵庭(えにわ)火山灰による古砂丘ができ、複合古砂丘と
なっている。(p61)

副葬品(ふくそうひん)：亡くなった人といっしょに墓に入れら
れるもの。生前使っていたものや、死後の世界で使うもの、死
者の霊(れい)をなぐさめるものなど。

プレート：地球の表面すべてをおおう、厚さ約100kmの岩盤(が
んばん：岩の板)のこと。大きく分けて十数枚あり、つめの
びるくらいの速さでたがいに動いている。(p23)

噴煙(ふんえん)：火山灰や火山ガス、水滴(すいてき)などが
一体になってふき出し、煙(けむり)のように見えるもの。火
口から立ち上った噴煙をとくに噴煙柱(ふんえんちゅう)とい
う。

噴火(ふんか)：火口(かこう)からマグマや火山ガスがふき出
すこと。同時に火道(かどう：マグマの通り道)にあった岩石

なども放出されることが多い。マグマのねばりが強くガスがで
きやすいと、爆発的（ばくはつてき）に噴火する可能性が高
くなる。

文化財保護法（ぶんかざいほごほう）：文化財を保存して活用を
することによって、国民の文化的向上や世界の文化の進歩に役
立てることを目的とした法律。土の中の遺跡（いせき）は、こ
の法律の中で「埋蔵文化財（まいぞうぶんかざい）」として
保護の対象となっていて、基本的に、ほらずに未来へ残すこと
になっている。（ p70）

へ

平地式住居（へいちしきじゅうきょ）：地面をほり下げず、その
まま床（ゆか）とした家（草やゴザなどはしく）。北海道では、
縄文時代にもつくられていたが、とくにアイヌ文化に入ってから
このタイプの家が主流となる。アイヌ文化でも倉庫では高床
式（たかゆかしき）のものがつくられている。

ベツ（アイヌ語）：川のこと。直別（ちよくべつ）・利別（とし
べつ）・更別（さらべつ）・途別（とべつ）・本別（ほんべ
つ）・戸蔭別（とったべつ）などの「別」や、音調津（おしら
べつ）の「べつ」、あるいは居辺（おりべ）の「辺」は、こ
の「ベツ」にあてたもの。（ p127）

変成岩（へんせいがん）：すでに岩石となっていたものが、熱や
圧力を受けることで、形づくっている鉱物（こうぶつ）の組み
合わせや岩石のつくりが変化したもの。

ほ

ほ乳類（ほにゅうい・哺乳類）：生まれたばかりの子どもが母
親（またはそれに代わるメス）の乳によって育てられる動物。
人も牛もネズミもコウモリもほ乳類。

盆地（ぼんち）：内陸で、周りを山や丘（おか）で囲まれた平地。

ま

マグマ：地下にあるとけた状態（じょうたい）の岩石。マグマが
冷えて固まったものが火成岩（かせいがん）。マグマが地上に
流れ出したもの（とそれが固まったもの）が溶岩（ようがん）。

丸木舟（まるきぶね）：太くまっすぐにのびた木の幹をけずり、
くりぬくことで舟（ふね）にしたもの。アイヌ語ではチフ。

マレク（アイヌ語）：魚をとる道具。カギが台木についたもので、
2～3mの柄（え）の先につけて魚につきさす。ささると、カ
ギが台木からはずれひもでぶらさがるため、カギにかえしがな
くても魚がはずれない。（ p120）

み

密猟（みつりょう）：法律や規則に従わずに、動物をとること。

密漁（みつりょう）：法律や規則に従わずに、魚などをとること。

む

無願開墾（むがんかいこん）：役所の許可をもらわないで、開墾
（かいこん：山野を開いて農地にすること）をおこなうこと。

も

モール（moor・ドイツ語）：（泥炭〔でいたん〕におおわれ
た）湿原（しつげん）。

モール温泉（モールおんせん）：植物性の成分が入った温泉。十
勝川温泉や帯広市内など、十勝中央部（の地下）に広くある。

や

焼き干し（やきぼし）：魚を焼いてから干し、保存性を高めたも

の。

ヤジリ（矢尻・鎌）：矢の先の、えものや的につきささるところ。
ヤリ（槍）：長い柄（え）の先に、先のとがった刃物（はもの）
をつけた狩り（かり）の道具。戦いの武器ともされる。

よ

溶岩（ようがん）：マグマが液体のまま地表に流れ出てきたもの。
またそれが固まってできた岩石のことも溶岩という。

溶結凝灰岩（ようけつぎょうかいがん）：火砕流（かさいりゅう）
などによって温度が高いまま厚くたまった火山灰で、中の火山
ガラスが変形してくっつきあうことでかたく固まってできた岩
石。固まり、冷える時に縮むことで、タテにヒビ（柱状節理：
ちゅうじょうせつり）が入ることがある。（ p37・p39）

養蚕（ようさん）：サナギのまゆから絹糸になる生糸（きいと）
をとるために、カイコ（カイコガの幼虫）を飼うこと。

ら

落葉広葉樹（らくようこうようじゅ）：広葉樹（こうようじゅ）
のうち、冬など決まった季節になると、葉を落としてつけなく
なる樹木。

り

流送（りゅうそう）：木材を川の水にうかべて、水の流れて下流
へ送ること。（ p180）

る

ルイベ（アイヌ語）：魚をこおらしたあととかす料理・保存法。
場所によって異なる方法を指す。「とけた食べもの」の意味。
料理の「ルイベ」の語源。（ p123）

れ

れき（礫）：岩がくだけたもので直径2mm以上のもの。2mm以下
のものは「砂」、1/16mm以下のものを「シルト」、1/256mm
以下のものを「粘土（ねんど）」という。

レッドデータブック（Red Data Book・英語）：絶滅のおそれ
がある野生生物について記載（きさい）したデータブックのこ
と。もとは国際自然保護連合が作成し、その後、各国や団体によ
っても作られている。日本では国（環境省：かんきょうしょ
う）が作成していて、北海道でも「レッドデータリスト」が作
られている。（ p216）

レリック：過去に栄え、その後はおとろえている生物のこと。北
海道のナキウサギなどは氷期のレリックである。個体数が減っ
たもの、分布がせまくなったものもレリックである。生きてい
る化石または遺存種（いぞんしゅ）ともいう。（ p63）

ろ

ローム：砂と粘土（ねんど）がほどほどに混じり合った土。少し
ねばりけがある。

露頭（ろとう）：川の流れや工事などによって地面がタテにけず
り取られることで、地下にある地層が見えるようになったガケ
や斜面（しゃめん）のこと。（ p21）

わ

和人（わじん）：北海道ではアイヌ民族やほかの少数民族以外の
日本人のこと。また、かつて大和朝廷（やまとちやうてい）
（に連なる政府）の支配下で、大和の文化で暮らしていた人々
のこと。古くは中国において日本人を指したことば（倭人：わ
じん）。